

京都府京都市方言



京都府方言区画

【京都市方言について】京都市方言は、大阪府北摂方言とともに京阪方言の中心に位置する。ただし、否定形（京都ミーヒン／大阪メーヘン）や敬語形（京都イカハル／大阪イキハル）動詞テ形に続く敬語形（京都イッタハル／大阪イッテハル）丁寧形式（京都オス・ドス／大阪オマス・ダス）ハル敬語の運用など、異なるところもある。近年は大阪府北摂方言や関西共通方言の影響で、両地域の違いがなくなりつつある。

【調査概要】本稿の記述は、先行研究の記述（参考文献参照）に加えて、京都市左京区で生育した筆者（1973年生まれ）の内省にもとづく。用例は、京都府山城方言の昔話資料から引用したものも含む（用例出典参照）。引用元を記していない用例は、筆者の内省によるものである。

【京都府の方言区画】京都府は南北に長く、その中に丹後・丹波・山城という3つの旧国が含まれる。京都府方言は、この旧国の境界にほぼ沿う形で北から順に丹後・丹波・山城の3つに大きく分けるのが一般的である。ただしこの3地域の間には明確な境界線があるわけではなく、連続的である。さらに細かい区分では、丹後方言を奥丹後方言（久美浜町・夜久野町）・丹後方言（網野町・峰山町）に二分し、丹波方言を西丹波方言（宮津市）・丹波方言（舞鶴市・綾部市・福知山市）・口丹波方言（亀岡市・京北町）の3つに区分することもある。丹後方言は、東京式アクセント・連母音アイがアエーとなる・コピュラがダである・ナル敬語を用いる・意志形が起キョーとなる、などの特徴を示す。丹波方言は、垂井式アクセント・連母音アイが融合しない・コピュラがジャである・テヤ敬語を用いる・意志形が起きョーとなる、という特徴がある。山城方言は、京阪式アクセント・コピュラがヤである・ハル敬語を用いる・継続形に～テルを用いる点で丹波方言とは異なる。京都市は山城方言域の北部に位置する。

京都府京都市方言の活用表

《動詞》

活用形		類別			
		a類 書く	b類 見る	来る	する
終止類	断定非過去	カク	ミル	クル	スル
	断定過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	命令	カケ カキ(-)	ミ(-)	コイ キ(-)	シ(-) セー
	禁止	カクナ	ミルナ	クルナ	スルナ
		カキナ(イナ)	ミナ(イナ)	キナ(イナ)	スナ シナ(イナ)
	意志	カコ(-)	ミヨ(-)	コ(-)	シヨ(-) ショー
	推量	カクヤロ(-)	ミルヤロ(-)	クルヤロ(-)	スルヤロ(-)
連体非過去	カク	ミル	クル	スル	
接続類	連体過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	中止	カイテ	ミテ	キテ	シテ
	仮定	カイタラ	ミタラ	キタラ	シタラ
	否定	カカヘン	ミーヒン ミヤヘン	キーヒン キヤヘン	シーヒン シヤヘン
カカン		ミン	コン コーヘン	セン セーヘン	
派生類	丁寧	カキマス	ミマス	キマス	シマス
	使役	カカス	ミサス	コサス キヤス	サス シヤス
	受身	カカレル	ミラレル	コラレル キヤレル	サレル シヤレル
	可能	ヨー カク カカレル カケル	ヨー ミル ミラレル ミレル	ヨー クル コラレル コレル	ヨー スル 《デキル》 《デケル》
	尊敬	カカハル	ミハル ミヤハル	キハル キヤハル	シハル シヤハル
	軽卑	カキヨル カイトル	ミヨル ミトル	キヨル キトル	シヨル シトル
	継続	カイテル	ミテル	キテル	シテル
	希望	カキタイ	ミタイ	キタイ	シタイ
	のだ	カクノヤ カクンヤ カクネン	ミルノヤ ミルンヤ ミルネン	ミルノヤ クルンヤ クルネン	ミルノヤ スルンヤ スルネン

a 類動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak・u	カイ-タ	kをiにする。「行く」ik・uはkをQ(促音)にし「イッ-タ」 またはQが脱落した「イ-タ」
g	嗅ぐ kag・u	カイ-ダ	gをiにする。-タが-ダになる。
s	出す das・u	ダシ-タ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
t/c	立つ tac・u	タッ-タ	t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin・u	シン-ダ	nをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ tob・u	トン-ダ	bをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom・u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
r	切る kir・u	キッ-タ	tをQ(促音)にする。
w/	買う ka(w)・u	コー-タ	wはR(長音)に。wの前の母音がaの場合はoに変える。基幹が2拍以上の場合はRが脱落することもある。
	誘う saso(w)・u	サソ-タ	

《形容詞・形容名詞・名詞述語》

		赤い	静か(だ)	学生[ガクセー](だ)
終止類	断定非過去	アカイ	シズカヤ	学生ヤ
	断定過去	アカカッタ	シズカヤッタ	学生ヤッタ
	推量	アカイヤロ(ー)	シズカヤロ(ー)	学生ヤロ(ー)
接続類	連体非過去	アカイ	シズカナ	《学生ノ》
	連体過去	アカカッタ	シズカヤッタ	学生ヤッタ
	中止非過去	アコ(ー)テ	シズカデ	学生デ
		アカ(ー)テ		
	中止過去	アカカッテ	シズカヤッテ	学生ヤッテ
仮定	アカカッタラ	シズカヤッタラ	学生ヤッタラ	
派生類	否定	アコ(ー)ナイ	シズカヤナイ	学生ヤナイ
		アカナイ	シズカヤアラヘン	学生ヤアラヘン
		アカイコトナイ	シズカ(ト)チガウ	学生(ト)チガウ
		アカイコトアラヘン		
	~なる	アコ(ー)ナル アカナル	シズカニナル	学生ニナル
副詞	アコ(ー) アコーニ	シズカニ		
丁寧	アコオス アカイデス	シズカドス シズカデス	学生ドス 学生デス	
のだ	アカイノヤ アカイニヤ アカイネン	シズカナンヤ シズカヤネン	学生ナンヤ 学生(ヤ)ネン	

1. 動詞の活用の特徴

(1)活用型と語類の対応

a 類動詞(五段動詞)は 型、b 類動詞(一段動詞)は 型と 型 r、「来る」は 型 k と 型 r、「する」は 型 s と 型 r の活用形をもつ。

a 類動詞(五段動詞)の所属語彙に共通語との違

いが若干みられる。共通語では b 類動詞に所属する「借りる」「任せる」が、カル・マカスという a 類動詞として用いられる。また「ワラカス(笑わせる)」など、共通語の「動詞+使役接辞」相当の意味を表す動詞語彙もある。

b 類動詞(一段動詞)の 型と 型 r の現れ方は

共通語とほぼ同じである。可能形で「ミレル」という形があり、共通語と同様に 型 r 化が進んでいる。共通語と異なる点としては、命令形「ミー」、禁止形「ミナ(イナ)」、尊敬形「ミハル」、軽卑形「ミヨル・ミトル」があるために共通語よりも 型が多く現われることがあげられる。

「来る」の 型 k のうち、命令形「キ(ー)」、禁止形「キナ(イナ)」、否定形「キーヒン・キヤヘン」、尊敬形「キハル・キヤハル」にイ段基幹が現れる点で共通語と異なる。共通語よりもイ段基幹が多く現れるという点ではイ段基幹を語幹とする 型に近づいているという見方もできる。また、b 類動詞と同様、可能形「コレル」の 型 r 化が進行している。

「する」の 型 s のうち共通語と異なるのは、命令形ではエ段基幹「セー」とイ段基幹「シー」が現れる点、否定形「セーヘン・セン」にエ段基幹が現れる点、そして禁止形「シナ(イナ)」、尊敬形「シハル・シヤハル」にイ段基幹が現れる点にある。共通語よりもイ段基幹・エ段基幹が多く現われることから、「来る」と同様に 型に近づいているという見方もできる。

(2)各活用形の特徴

〈断定非過去形・連体非過去形〉

共通語と同様に、断定非過去形と連体非過去形は同形で、ウ段形「カク」「ミル」「クル」「スル」となる。型 r の動詞、例えばトル(a類)・ミル(b類)・クル・スルなどが、子音 n で始まる接辞・形式名詞に接続する場合、次の例のように「ル」が「ン」になることがある(例は「する」の場合)。

終助詞「な」 スルナ スンナ
形式名詞「の」 スルノ スンノ

- ・「あのう……、こんなにぎょうさんの蟹とって、どないしはんの。」(あのう……、こんなたくさんの蟹をとって、どうされるの。)(京都・「蟹満寺の話」)
- ・「 はて、おかしなこっちゃ。死んでんのかいな。」(はて、おかしなことだ。死んでいるのかな。)(京都・「さるのう飼い」)

格助詞や単なる名詞に接続する場合は、これらが子音 n で始まるものであっても撥音化しない。

格助詞「に」 スルニワ xスンニワ

〈断定過去形・連体過去形〉

断定過去形・連体過去形は同形で、a 類動詞は基幹音便形、b 類動詞では 型基幹 (= 語幹)「来る」「する」は 型 k・s イ段形「キ」「シ」に「タ」が接続した形が用いられる。a 類動詞の基幹音便形で共通語と異なるのは、語幹末子音が w の動詞(いわゆるワ行五段動詞)である。例えば「カウ(買う・飼う)」「アウ(会う・合う)」は、「コータ」「オータ」のようないわゆるウ音便形をとる。ただし最近では共通語と同じ促音便形「カッタ」「アッタ」も併用される。

- ・そして、この二ひきのかえる、山のてっぺんで、ぱったりこと出おうたそうな。(そして、この二匹の蛙は山のてっぺんでぱったりと出会ったそうだ)(京都・「京のかえる 大阪のかえる」)
- ・「おせつが、近くのみどり川の川べを歩いてると、村の男しゅうが、ぎょうさんの蟹をつかまえてるのに出会ったんやわ。」(おせつが、近くのみどり川の川辺を歩いてると、村の男達が、たくさんの蟹を捕まえているのに出会ったのだよ)(京都・「蟹満寺の話」)

また、a 類「行く」は語幹末子音が k だが、促音便形「イッタ」あるいは「イタ」という形になる。

〈命令形〉

「カキ(ー)・ミ(ー)・キ(ー)・シ(ー)」のようにイ段形、あるいはイ段形を長音化した形による命令形がある。また、「する」にはさらに 型 s のエ段長音形「セー(セイ)」がある。これらに加えて、a 類動詞・「来る」には共通語と同じ形式「カケ・コイ」がある。現在では、b 類動詞・「する」でも共通語と同形の「ミロ・シロ」を使うことが多くなっている。

- ・「わしがするように、みんな泣きまねしい。」(私がするように、みんな鳴き真似をしなさい)(京都・「一休さんのとんち」)
- ・「ええか、よう考えて売りや。」(いいか、よく考えて売ちなさいよ)(京都・「チャックリカキフ」)

これらの命令形は、終助詞「ヨ/ヤ/ナ」の接続の仕方に違いがある。

	ヨ	ヤ	ナ
イ段基幹による命令形			
セー(「する」の工段形)			×
共通語と同じ命令形			×

イ段形の命令形には終助詞ヨ・ヤ・ナが後接できるが、通常の命令形と「する」の工段命令形はナに接続できない。

また、「カキヨシ・ミヨシ」のように、「イ段形+ヨシ」で命令(勧め)を表すことがあるが、この場合はイ段形が長音化しない。

- ・ 「もう、つかまったらあかへんえ。さあ、はよう、人のこんようなところへ行きよし。」(もう捕まってはだめだよ。さあ、早く人が来ないところに行きなさい)(京都・「蟹満寺の話」)

さらに、中止形を用いた命令表現に「カイトーミ(＜カイテ オミ)」「書いてみなさい」というものがある。

そんなこと言わんと、一口食べとーみ。(そんなこと言わずに一口食べてみなさい。)

〈禁止形〉

禁止形は断定非過去形に「ナ」を付けた形「カクナ・ミルナ・クルナ・スルナ」を用いる。型「ル」の動詞の場合、「ミンナ・クンナ・スンナ」のように「ル」が「ン」になることがある。また、「カキナ・カキナイナ」(以下、「カキナ(イナ)」と表記)、「ミナ(イナ)」のような「イ段形+ナ(イナ)」という形もある。

また、後述する否定意志形「カカントコ」のイ段命令形「カカントキ」によっても禁止を表すことができる。

- ・ パチンコなんて行かんとき。(パチンコなんて行くな)

〈意志形〉

a類動詞は「カコ(ー)」のようなオ段形、b類動詞意志形は「ミヨ(ー)」のような型基幹に「ヨ(ー)」を後接する形をとる。「来る」は「コ(ー)」のように型kオ段形単独で用いる。古くは型kイ段形に「ヨ(ー)」が付く形「キヨ(ー)」を用いていたが、現在ではあまり使われなくなっており、共通語と同形の「コヨ(ー)」が使われ始めている。「する」は型sイ段形に「ヨ(ー)」を付す形、あるいはそ

の縮約形「シヨ(ー)」を用いる。いずれの形も「カコ・ミヨ」のように長音が脱落することがある。

- ・ 「おしょうさんがどないしよ思てはったら、(和尚さんがどうしようと思っておられたら、)(京都・「一休さんのとんち」)

なお、「来る」が補助動詞として用いられる場合も「コ(ー)」が使われる。

- ・ ちょっと買い物行ってこー(ちょっと買い物に行ってこよー)

また、否定の意志形「カカントコ(ー)・ミントコ(ー)・コントコ(ー)・セントコ(ー)」がある。この活用形は「否定形+トコ(ー)」で表される。当該方言の否定形には「ン」を付ける形と「ヘン」を付ける形があるが、否定意志形の場合は「ン」否定形だけを用いる。「する」の場合は「シントコ(ー)」という形もある(否定形で「シン」はほとんど用いられない)。

- ・ 今日は雨降ってるし、もう行かんとき。(今日は雨が降っているから、もう行かないでおこう。)

この「～トコ」は「～ないで」を意味する「カカント」「ミント」などの「～ント」に「オコー」が後接した形である。また、否定のテ形「カカントコ」「ミントコ」に「オコー」を付けた「カカントコ」「ミントコ」もあるが、ほとんど使われていない。

〈推量形〉

推量形には、断定形に「ヤロ(ー)」が接続した「カクヤロ(ー)・カイトヤロ(ー)」という形が使われる。推量形の末尾の長音が脱落することもある。

- ・ 「なんや、けったいやな。どっから、こんなええお茶のかおりがするんやろ。」(何だか不思議だな。どこからこんなに良いお茶の香りがするのだろうか)(京都・「お茶つば道中」)
- ・ 「ええっと、そのおつゆ、ふたをとらんと、食べてもらえまへんやろか。」(えーっと、そのおつゆ、蓋をとらずに食べてもらえませんか)(京都・「一休さんのとんち」)

〈中止形〉

中止形は「テ」によって表される。「テ」は、a類動詞は基幹音便形に、b類動詞は型基幹に、「来る」は「キ」に、「する」は「シ」に後接する。断定過去形・連体過去形と同様に、伝統的方言では語幹末子

音がwのa類動詞(いわゆるワ行五段動詞)の音便語幹が「オーテ」(会って)「コーテ」(買って)のようなウ音便形になるが、近年の若い世代は促音便形を用いることが増えている。

- ・「おかしいなあ、おまえ、なんちゅうて売ったんじゃあ。」(おかしいなあ、お前は何と云って売ったんだ)(京都・「チャックリカキフ」)
- ・「うえーん、うええん、わしのかしがない、かしがない。お姫さんが取って、食うてしもた。(うえーん、うええん、私の菓子が無い。菓子が無い。お姫さんが取って、食べてしまった。)(京都・「一寸法師」)
- ・鬼はしばらく一寸法師をさがしてはったんやが、そのうち、えへら、えへら笑って、(鬼はしばらく一寸法師を探していたんだが、そのうち、えへら、えへら笑って)(京都・「一寸法師」)

そして、おせつは、へびとたたかっていっしょに死んでいった蟹たちと一びきのかえるを、ていねいとむらってあげはったんや。(そして、おせつは、蛇と戦って一緒に死んでいった蟹たちと一匹の蛙を丁寧に弔ってあげたのだ)(京都・「蟹満寺の話」)

全動詞で「カケバ」「ミレバ」などのバ形はほとんど用いられず、専ら「タラ」を用いる。また、「カキヤー」「ミリヤー」のようなバ形の短縮形もほとんど用いられない。「タラ」は、a類動詞は基幹音便形に、b類動詞は 型基幹に、「来る」は「キ」に、「する」は「シ」に後接する。

- ・「まて、まて。そのかえるをにがしてやれ。そうしてくれたら、おなえの願いをなんでも聞いてやるがな。」(待て、待て。その蛙を逃がしてやれ。そうしてくれれば、お前の願いを何でも聞いてやるよ)(京都・「蟹満寺の話」)
- ・「そんなもん、かんたんじゃ。『茶 栗 柿 麩』言うて歩いたら、あっちゃのほうから買いに来るわな。」(そんなの簡単だ。『茶 栗 柿 麩』と言って歩けば、あちらの方から買いに来るよ)(京都・「チャックリカキフ」)

〈否定形〉

a類動詞は 型ア段に、b類動詞は 型基幹に、「来る」は 型k「コ」「キ」に、「する」は 型s「セ」

「シ」に否定接辞「ン」または「ヘン」が付く。「来る」「する」に「ン」が後接する場合は「コン」「セン」のように 型k才段・ 型s工段形しか用いられないが、「ヘン」が付く場合は「コーヘン」「キーヒン」、「セーヘン」「シーヒン」のように 型イ段形も併用される。否定接辞ヘンは、「ミーヒン・キーヒン・シーヒン」のようにイ段形に接続する場合はヒンとなり、それ以外はヘンとなる。なお、基幹の長さが1拍の場合には「ミーヒン・ネーヘン・キーヒン・シーヒン」のように長音化する。

- ・「そしてまた、どうして、夜だけせわをして、朝になると、すがたが見えんようになるのか、ふしぎなこっちゃった。」(そしてまた、どうして夜だけ世話をして、朝になると姿が見えなくなるのか、不思議なことだった)(京都・「吉ばあさんとかげぜん」)
- ・「なんやのどにふたができたみたいで、とんと声が出えへんのや。」(何か喉に蓋ができたみたいで、全然声がでないのだ)(京都・「チャックリカキフ」)
- ・「吉ばあさんがいくら呼んでも、返事がきこえてきいひんのや。」(吉ばあさんがいくら呼んでも、返事が聞こえてこないのだ)(京都・「吉ばあさんとかげぜん」)
- ・「足もとに、一びきのかえるが、じつとうずくまって動こうとしいひんのや。」(足下に一匹の蛙がじつとうずくまって動こうとしないうのだ)(京都・「蟹満寺の話」)

否定接辞ンとヘンはどちらも活用形を備えているが、以下のように、活用形によってはヘンが使いにくいこともある。

	ン	ヘン
過去	カカナンダ カカンカッタ	カカヘナンダ カカヘンカッタ
推量	カカンヤロ(一)	カカヘンヤロ(一)
中止	カカンデ カカンカッテ	△カカヘンデ △カカヘンカッテ
仮定	カカンカッタラ カカンデモ カカントケバ カカナ(アカン)	カカヘンカッタラ △カカヘンデモ △カカヘントケバ
~なる	カカンヨーニ	△カカヘンヨーニ

なお、大阪方言同様、この方言でも「カカンデーカカンカッテ」のように、中止形にテンスの対立がある(高木 2000)。

〈丁寧形〉

a 類動詞は 型イ段形に、b 類動詞は 型基幹に、「来る」は「キ」に、「する」は「シ」に「マス」が付く。

- ・「さいなら。わし、都にのぼって、えらい、えらい一人になりますわ。(さようなら。私、都にのぼって、偉い偉一人になりますよ)(京都・「一寸法師」)

なお、「マス」の否定形は「マヘン」となり、意志形は「マヒヨ(ー)」となることがある。

- ・「いいや、それだけは受けとれまへん。」(いいえ、それだけは受け取れません)(京都・「鯉山」)
- ・「ごっつおさん、そんなら奈良の大仏つあん、行きまひよか。」(ごちそうさま。それじゃ奈良の大仏さん、行きましょうか。)(京都・「大仏の食いにげ」)

〈使役形〉

a 類動詞はア段形に「ス」「セル」が、b 類動詞は 型基幹に「サス」「サセル」が、「来る」は「コ」に「サス」「サセル」が、「する」は「サ」に「ス」「セル」が付く。「来る」「する」の場合は、「キ」「シ」に「ヤス」を付けた形「キヤス」「シヤス」という形もある。この「ヤス」は「ラス」の「r」が「j」に変化した形であると考えられる。「ス」「サス」の付く形は a 類動詞に準じた活用をし、「セル」「サセル」の付く形は b 類動詞に準じた活用をする。

- ・「なんとかおかあさんに蛸を食べさしてあげたいわ。」(何とかお母さんに蛸を食べさせてあげたいよ)(京都・「蛸薬師」)
- ・言うて、どんどんたべさせはったそうや。(と言って、どんどん食べさせられたそうだ)(京都・「みょうが」)

〈受身形〉

a 類・b 類動詞は 型ア段形に、「来る」は 型 r のア段形「コラ」に、「する」は 型 s ア段形「サ」に「レル」が付く。「来る」「する」の場合は、「キ」「シ」に「ヤレル」が付いた形「キヤレル」「シヤレル」もある。この「ヤレル」は「ラレル」の「r」が「j」

に変化したものと考えられる。「レル」の付いた形は b 類動詞に準じた活用をする。

- ・法事がすんだあとで、ごっそうが出されてきたんやて。(法事が済んだ後で、ご馳走が出されてきたんだと)(京都・「一休さんのとんち」)
- ・そうや、気のみじかい殿さんやったら、打ち首にされてしまうこともあるんや。(そうだ、気の短いお殿様だったら、打ち首にされてしまうこともあるのだ)(京都・「お茶つぼ道中」)

〈可能形〉

「カケル」「ミレル」「コレル」のように 型エ段形に「ル」が付く形、「カカレル」「ミラレル」「コラレル」のように 型ア段形に「レル」が付く形、「ヨーカク/カカン」のような「ヨー+断定形/否定形」の形、の3種類が併用される。は心情・能力可能の意味でのみ用いられるが、は能力可能・状況可能どちらの意味でも用いられる。

- ・「ふたりとも小判をよう受けとらんというのなら、その小判でコイをほってもらい、祇園祭りの山にしたらどうじゃ。」(二人とも小判を受け取れないというのなら、その小判でコイをほってもらい、祇園祭の山にしてはどうだ)(京都・「鯉山」)

との違いは、以下のように、a 類動詞の肯定形では の形があまり用いられないという点にある。

	肯定	否定
書く	カケル	カケヘン カカレヘン
見る	ミレル ミラレル	ミレヘン ミラレヘン

- ・「奈良の大仏つあん、わしゃ、もう、はらがへって、これいじょう動けんわい。」(奈良の大仏さん、私はもう腹が減って動けないよ)(京都・「大仏の食いにげ」)
- ・「あれでは、からすは飛べへんやないか。」(あれでは鳥は飛べないではないか)(京都・「さるのう飼い」)
- ・「夜かて、ねようと思えば思うほど、ねつかれへんのどす。」(夜だつて、寝ようと思えば思うほど、寝付けなひのです)(京都・「あの

鬼こわい)」

〈尊敬形〉

尊敬形としては「カカハル・ミ(ヤ)ハル」のような「ハル」が用いられる。「ハル」は、a類動詞はア段形、b類動詞は型基幹、「来る」は「キ」、「する」は「シ」に付く。b類動詞・「来る」・「する」に付く「ヤハル」は、基幹の長さが1拍の場合に用いられやすく、2拍以上になるとあまり用いられない。

- ・「そんなもんなめたら、おしょうさんがおこらはる。」(そんなものをなめたら、和尚さんがお怒りになる)(京都・「一休さんのとんち」)
- ・「いなかの男の人が、京の町へ出てきやはったそうな。」(田舎の男の人が京の町へ出てこられたそうだ)(京都・「ことしゃみせん」)

また、「ハル」は動詞テ形に接続する場合、「カイタハル(書いておられる)・ミタハル(見ておられる)」のように「～タハル」という形になる。

- ・「いいや、わしゃ、奈良の大仏つあんが、ぎょうさん持ったはるおもて、はらいっぱい食わしてもろたんや。」(いいえ、私は、奈良の大仏さんがたくさん(お金を)持っておられると思って、お腹いっぱい食べさせてもらったのだ)(京都・「大仏の食いにげ」)

「オカキヤス」のような「オ+イ段形+ヤス」という尊敬形もあるが、全ての動詞で使えるわけではない。「オ+イ段形+ヤス」自体が断定形しか持たない、断定非過去の形で命令を表す、などの点で生産性が低い。現在では「～{テ/ト}オクレヤス」(～してください)「ごめんやす」(ごめんください)といった定型表現で用いられることが多い。

- ・「しかし、今すぐにと言われても、じゅんびもできてしまへんし……、もう二、三日待っとおくれやす。」(しかし、今すぐにと言われても準備もできていけませんので…。もう二、三日待ってください)(京都・「蟹満寺の話」)
- ・「そんなこと、言わはらんと、とっとくれやす。」(そんなことをおっしゃらずに、受け取ってくださいよ)(京都・「鯉山」)
- ・「もう、かえりまっさ。ほんなら、ごめんやす。」(もう帰りますよ。それでは、ごめんください)(京都・「京のかえる 大阪のかえる」)

〈軽卑形〉

a類動詞はイ段形、b類動詞は型基幹、「来る」は「キ」、「する」は「シ」に「ヨル」が付いた形が、軽卑の意味を帯びた完成相を表す。また、a類動詞は基幹音便形に、b類動詞は型基幹に、「来る」は「キ」に、「する」は「シ」に「トル」が付く形もある。「トル」は軽卑の意味を帯びた継続相を表す。「ヨル」「トル」の付く形はa類動詞に準じた活用をする。

- ・「あしたの朝になってみい、きつと、あの旅人は、持っとるお金、みな忘れていきよぞ。」(明日の朝になってみる、きつと、あの旅人は、持っているお金をみんな忘れていくぞ)(京都・「みょうが」)
- ・「どないしたんや、法師が泣いとる。」(どうしたんだ。法師が泣いている)(京都・「一寸法師」)

〈継続形〉

継続形は「ている」に由来する「テル」を用いる。「テル」はa類動詞の基幹音便形、b類動詞の型基幹、「来る」「する」の型k・sイ段形に接続する。

- ・「どこにも人の姿がのうて、けったいな木いや花がさいてるだけや。」(どこにも人の姿がなくて、奇妙な木や花が咲いているだけだ)(京都・「一寸法師」)

〈希望形〉

希望形には、a類動詞の基幹イ段形、b類動詞の型基幹、「来る」は「キ」、「する」は「シ」に「タイ」を接続した形を用いる。「タイ」形は形容詞型の活用をする。

- ・「ひるまの約そくや、おまえの娘をもらいたい。」(昼間の約束だ。お前の娘をもらいたい)(京都・「蟹満寺の話」)

〈のだ形〉

連体形に「ノヤ・ンヤ・ニヤ」が付く形、および断定形に「ネン」が付く形が用いられる。「ノヤ」については、連体非過去の形が「ル」で終わる動詞に付く場合、「ミンノヤ・ミンネン」のように「ル」が「ン」に変化することがある。また、「ネン」の過去の形を作る場合、以下のように、a類動詞は基幹音便形、b類動詞は型基幹、「来る」は「キ」、「する」は「シ」に「テン」が付く形になる。

	断定非過去	断定過去
書く	カクネン	カイテン
見る	ミルネン・ミンネン	ミデン
来る	クルネン・クンネン	キテン
する	スルネン・スンネン	シテン

なお、「ノヤ」は「カクンヤ・カクニヤ」のように「ンヤ・ニヤ」になることがある。

- ・ 「いいや、わしや、奈良の大仏つあんが、ぎょうさん持ったはるおもて、はらいっぱい食わしてもるたんや。」(いいや、わしは、奈良の大仏さんが、たくさん持っていらっしゃると思って、腹一杯食べさせてもらったんだ)(京都・「大仏の食いにげ」)
- ・ 買い物行くにやけど、何か要る?(買い物に行くんだけど、何か要る)

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

形容詞の中止形(テ形)・否定形・～なる形・副詞形・丁寧形(オスを用いる形)では、語幹末母音が a・i・e の場合に、交替語幹を用いた形がある。語幹末が u・o の場合は交替がない。

語幹末母音	交替後	例
a	o	アカイ アコ(ー)ナル ナイ ノーナル コワイ コオ(ー)ナル
i	yu	オーキー オーキュ(ー)ナル ウレシー ウレシュ(ー)ナル
u	u	ワルイ ワル(ー)ナル ヌクイ ヌク(ー)ナル
e	o	エー ヨーナル
o	o	オモイ オモ(ー)ナル セコイ セコ(ー)ナル

中止形・否定形・～なる形においては、例えば「アカナイ・アコ(ー)ナイ」のように語幹と交替語幹の両方が現れる。交替語幹を廃して、語幹と基本形だけで活用させようという簡略化の表れかもしれない。

〈断定非過去形・連体非過去形〉

断定非過去形と連体非過去形は同形で、語幹に「イ」を付ける。

〈断定過去形・連体過去形〉

断定過去形と連体過去形は同形で、語幹に「カタ」を付ける。

〈推量形〉

推量形には、「アカイヤロ(ー)」「アカカタヤロ(ー)」のように、断定形に「ヤロ(ー)」を接続した形を用いる。「ヤロー」の長音は脱落することがある。

- ・ 「こんど、お茶と、栗と、柿と、麩をあきないしようと思てんのやけど、どうしたらええやる。」(今度、お茶と柿と麩を高いしようと思ていんだけど、どうしたらいいだろう)(京都・「チャックリカキフ」)

〈中止非過去形〉

中止非過去形には、交替語幹やその長音形に「テ」が接続した形「アコ(ー)テ」と、語幹やその長音形に「テ」が接続した形「アカ(ー)テ」が併用される。

- ・ なんちゅう島かなあ、思て、あたりを見わたしたはったけどな、どこにも人の姿がのうて、けったいな木いや花がさいてるだけや。(何という島かなあと思て、辺りを見わたされたけれどね、どこにも人の姿が無くて、奇妙な木や花が咲いているだけだ。)(京都・「一寸法師」)
- ・ 長者さんには、おせつという美しうてやさしい娘があったそうや。(長者さんにはおせつという美しくて優しい娘がいたそうだ)(京都・「蟹満寺の話」)
- ・ 雨がザバザバふってつても、ずんぶりぬれながら、雪がピューピューふきつけつても、寒うてがくがくふるえながら、その行列が通りすぎよるまで、じっと土下座しとるんやがな。(雨がザバザバ降っていても、ずんぶり濡れながら、雪がピューピュー吹きつけていても、寒くてガクガク震えながら、その行列が通り過ぎるまで、じっと土下座しているんだよ)(京都・「お茶つぼ道中」)

〈中止過去形〉

動詞型音便基幹に「テ」が付く。この形は、次例のように主節のテンスが過去の場合にのみ用いられ、主節テンスが非過去の場合には使えない(高木

2000)。

- ・ 昨日読んだ本あかかって目チカチカしたわ。
- ・ ×この本あかかって目チカチカする。

〈仮定形〉

語幹に動詞型音便基幹に「タラ」が続く形「アカカッタラ」が用いられる。「アカケレバ」のような「語幹-ケレ-バ」の形はほとんど用いられない。

- ・ 高かったら、買わんでええで。(高ければ、買わなくていいよ)

〈否定形・なる形〉

交替語幹やその長音形「アコ(ー)」と語幹「アカ」を併用する。中止形では語幹「アカ」が長音化することがあったが、否定形・～なる形では長音化しない。否定形は、「ナイ」が接続した形「アコ(ー)ナイ」「アカナイ」が用いられる。なる形は、「ナル」が接続した形「アコ(ー)ナル」「アカナル」が用いられる。

- ・ 夜が明けて、寺のまわりもだんだん明るうなあっていったんやて。(夜が明けて、寺の周りもだんだん明るくなっていったんだって)(京都・「うかれねこの恩がえし」)
- ・ しんどうなって、とちゅうで頭を上げたり、その行列を横切ったりしたら、すぐその場でとらえられるんやで。(しんどくなって、途中で頭を上げたり、その行列を横切ったりしたら、すぐにその場で捕らえられるんだよ)(京都・「お茶つぼ道中」)
- ・ ふしぎなことに、吉ばあさんのおいてかえるかげぜんは、つぎの日に行くと、もうちゃんとうなっているのや。(不思議なことに、吉ばあさんの置いて帰るかげぜんは、次の日に行くと、もうちゃんと無くなっているのだ)(京都・「吉ばあさんとかげぜん」)

〈副詞形〉

副詞形は交替語幹やその長音形単独、あるいは交替語幹の長音形に「二」を接続した形が用いられる。交替語幹単独形の場合は長音形でなくともよいが、「二」が接続した形は必ず長音化する。

- ・ 「ほんなら、わしの背い、たこしてほしい。」(それなら、私の背を高くして欲しい)(京都・「一寸法師」)
- ・ 「借れたのなら借れたと、はよう言わんかい

……。」(借りられたのなら借りられたと早く言わないか)(京都・「大仏の食いにげ」)

〈丁寧形〉

断定形に「デス」が付く形、「アコオス」のように交替語幹に丁寧接辞「オス」が付く形、の2種類が併用される。の形は原則として交替語幹をもとにするが、語幹がイ段音で終わる場合は、「ウレシオス」「オーキオス」のように、語幹に「オス」が付くこともある。「オス」が付いた形は「する」に似た活用をする(推量形・否定形が「する」とは異なる)。

推量 オコオスヤロ / アコオッシャロ
(赤いでしょう)

過去 アコオシタ(赤うございました)

中止 アコオシテ(赤うございまして)

否定 アコオヘン(赤くありません)

仮定 アコオシタラ(赤うございましたら)

- ・ 「おしょうはんに、そのお方をていねいにもてなしてほしおすねん。」(和尚さんに、そのお方を丁寧にもてなして欲しいのです)(京都・「うかれねこの恩がえし」)

若年層話者は「オス」を用いることが少なくなってきた。

〈のだ形〉

連体形に「ノヤ」「ンヤ」「ニヤ」が付く形、および断定形に「ネン」が付く形になる。「ニヤ」は「ノヤ」の音声的縮約形であるが、接続助詞(特に「ケド」)や終助詞が後接する場合に用いられる。なお、「ネン」の過去形を作る場合は、動詞型音便基幹に「テン」を付けた形を用いる。

【形容名詞述語・名詞述語】

〈断定非過去形〉

形容名詞述語・名詞述語とも断定非過去形は、形容名詞・名詞に「ヤ」が付く形になる。形容名詞述語の終止・断定非過去の形は通常「静かヤ」だが、「静かナ」が使われることもある。

- ・ 今日は静かななあ。(今日は静かだねえ)

〈連体非過去形〉

形容名詞述語の連体非過去形は、形容名詞に「ナ」が付く形が用いられる。名詞には述語としての連体非過去形を用いず、格助詞「ノ」を用いる。

〈断定過去形・連体過去形〉

形容名詞述語・名詞述語の断定過去形・連体過去形は同形で、動詞型基幹音便形「ヤッ」に過去辞「タ」を後接する形「シズカヤッタ」「学生ヤッタ」になる。

- ・ 「いっぺん、小さい声で言うてみちやる。茶と栗と柿と麩やったなあ、」(一遍、小さい声で言うてみてやろう。茶と栗と柿と麩だったなあ)(京都・「チャックリカキフ」)

〈推量形〉

動詞・形容詞述語と同様に、「ヤロ(ー)」が用いられる。「ヤロ(ー)」は形容名詞の語幹、名詞に直接接続する。動詞・形容詞の場合と同様に、「ヤロ(ー)」の長音は脱落することがある。

- ・ 「こんな夜おそう、だれやろ。」(こんな夜遅く、誰だろう)(京都・「蟹満寺の話」)

〈中止非過去形〉

中止非過去形は「デ」が接続した形となる。

- ・ 「京の都も、きれいでええとこやが、なんでも話に聞くと、となりの町の大阪ちゅうところも、にぎやかな大きな町や言うやないか。」(京の都もきれいで良い所だが、何でも話に聞くと、隣の町の大阪という所も、賑やかな大きな町だと言うじゃないか)(京都・「京のかえる 大阪のかえる」)
- ・ 「きょうは、まあ、ええお天気で。(今日は、まあ、良いお天気で)(京都・「一休さんのとんち」)

〈中止過去形〉

形容詞と同様に形容名詞・名詞述語にも中止過去形があり、動詞型音便語幹に「テ」が付く形を用いる。主節のテンスが過去の場合にのみ用いられる。

- ・ あいつ今まだ 19 歳 { で / × やって } 選挙権ないねん。
- ・ あいつ去年まだ 19 歳 { で / やって } 選挙権なかってん。

〈仮定形〉

動詞型基幹音便形「ヤッ」に「タラ」が後接する「シズカヤッタラ」「学生ヤッタラ」も用いられる。

- ・ 「ほんに、あんな子おなら、もらわんほうがよかったわ。」(本当に、あんあ子なら、貰わない方が良かった)(京都・「一寸法師」)
- ・ 「これやったら、わざわざ見に行くこともあ

らへんがな。(これだったら、わざわざ見に行くこともないじゃないか)(京都・「京のかえる 大阪のかえる」)

〈否定形〉

「静かヤナイ/ヤアラヘン/トチガウ」など複数の形式がある。「静かヤナイ」は形容詞型の活用、「静かヤアラヘン」は否定接辞ヘンと同じ活用、「静かトチガウ」は動詞チガウと同じ活用をする(ただし、過去形にトチガウカッタもある)。この「～トチガウ」は「～トチャウ」「～チガウ」など「ト」が脱落したり、「チガウ」が「チャウ」になったりすることがある。

- ・ 「コイをこうたのは大家さんとちがうのやさかい、」(鯉を買ったのは大家さんじゃないのだから)(京都・「鯉山」)
- ・ 「なんや、法師はばけもんとちやうかいなあ。」(なんだ、法師は化け物じゃないかな)(京都・「一寸法師」)

〈副詞形・なる形〉

「ニ(ナル)」を後接した形となる。なる形の場合、「静かなる」のように「ニ」が「ン」になることもある。

〈丁寧形〉

形容名詞・名詞に「デス」あるいは「ドス」が付く。「ドス」が付いた形は次のように活用する。

推量 静かドスヤロ/ドッシャロ
過去 静かドシタ
中止 静かドシテ
仮定 静かドシタラ

「ドス」は否定形をもたないため、丁寧否定形は「静かヤオヘン」のように「オス」の否定形を用いる。

- ・ 「それは、まあ、えらい、ごくろうさんどす。」(それは、まあ、どうもご苦労様です)(京都・「京のかえる 大阪のかえる」)
- ・ 「そら、ほんまに、えらいさいなんどしたなあ。」(それは、本当に、どうも災難でしたね)(京都・「鯉山」)

「ふたりともあんまり美しい心やさかい、この話をいつまでもあとの世の人に伝えたいと思わはったんどっしゃるなあ。」(二人ともあまりに美しい心なので、この話をいつまでも後世の人に伝えたいと思われたんでしょね)(京都・「鯉山」)

〈のだ形〉

形容名詞・名詞の連体形に「ンヤ」が後接した形となる。動詞・形容詞述語とは異なり、「ノヤ」(「静かなノヤ・学生ノヤ」)が用いられることは稀である。また、断定形に「ネン」を後接する形もある。名詞述語の場合、名詞に直接「ネン」が接続する形「学生ネン」が用いられることもある。「ネン」の過去形は、動詞型基幹音便形「ヤッ」に「テン」を後接する形「シズカヤッテン」「学生ヤッテン」を用いる。なお、形容詞のように「ニヤ」が現れることはない。

用例出典

京都：京都のむかし話研究会編(2005)『読みがたり

京都のむかし話』日本標準

参考文献

- 遠藤邦基(1982)「京都府の方言」『講座方言学7 近畿地方の方言』国書刊行会
奥村三雄(1962)「京都府方言」榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂
高木千恵(2000)「大阪方言におけるテ形について—形容詞・名詞述語・動詞否定形式のテ形(相当)形式—」『阪大社会言語学研究ノート』第2号
中井幸比古・奥村三雄・久野眞・久野マリ子(1997)『日本のことばシリーズ26 京都府のことば』明治書院

(松丸真大)